

長崎自然共生フォーラム News Letter

短い梅雨明け号（第24号） 2019年7月25日 発行

本会設立から20年目を迎えました。

今後どうしましょうか？

会長 宮原和明

振り返りますと私、当会設立当時は長崎総合科学大学工学部建築学科で学生達と建築デザインについてあーでもない、こうでもないという議論をしながら、地球温暖化の顕在化に気づいた時期でもありました。その要因が化石燃料の大量消費にあると大方断定されつつあった時期でもあり、化石燃料起源の大量電気エネルギーを消費する宇宙船のような空調設備を有する超高層建築等の建築学に携わる者として、ほーっておけないと気づき、私が長崎市伝習所にて市民環境活動を始めた時期とも重なります。

市民リーダーとして共感する市民と一緒にあって必死に、地球温暖化防止について学び行動を起こしました。そんな折り先進国の化石燃料起源の温暖化物質排出抑制を求める1997年の京都議定書づくりに関わった京都の環境NGO団体と出会いました。彼らが主宰する、低炭素の持続可能な地域社会づくりを目指す自治体の、「日本の環境首都コンテスト」環境NGO全国ネットワーク団体に入りました。（10団体）彼らからいつも学びながらドイツの環境先進都市の視察に二回出

かけました。2010年 ハンブルグ市からハノーファー市、ハム市、ハイデルベルグ市、2013年、ミュンスター市、ラインベルグ市、NRW州、デュッセルドルフ、スウェーデンのストックホルム市へ。

日本も今やっと、2015年気候変動枠組み条約COP21のパリ協定（2100年までに化石燃料使用ゼロを目指す）と同時期に私の専門分野・建築物の省エネ基準が施行され、環境エネルギー減や自然エネルギー増の住宅や建築においては、官、産、民、学のプラットフォームを形成し、積極的に環境・経済・社会を統合した持続可能な地域づくりの施策を深化させねばなりません。同じく国連にて2015年成立のSDGs（2030）についても前号ニュースレターで紹介しましたが、会員の造園建設業のみなさまが前述の持続可能な地域づくりにどのようにかかわっておられるのか、機会をみて教えていただきたいと思います。

一方、同じころ（2000年）当会が設立され、造園学会九州支部長崎大会を手伝ったご縁で本会会長を私が引き受けることになりました。当初は、産学官の連携がスムーズに行っていたこともあり、講演や研究会等にもそれなりに活動への参加がありました。その後、県行政部署の事情に

より事業者との交流が疎遠になりましたが、年1回の総会の機会をとらえ細々と国、県の自然環境政策につながるご講演をお願いしてつないできました。また総会開催は、会員皆様のご協力により、佐世保市、大村市、長崎市の持ち回りで開催して、講演者との交流を深め楽しい時間を共有して参りました。ありがとうございました。

今後に向けては、長崎自然共生フォーラムの組織を活かしながら、前述の環境・経済・社会を統合した持続可能な地域づくりの場作りも、もっと進化させることができそうな気もしますが、会長としての力量不足もあって組織の課題は残ったままです。

さて、今後この組織を持続するのか、ここらでたたむのか、についても忌憚のない意見交換をする必要を感じております。今回の総会后、交流会の機会にこの課題について皆さんと意見交換したいと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

<宮原の近況報告写真>

宮原は、2019年1月17日、19日、京都にて開催の「環境首都創造フォーラム in 京都」に参加してきました。

北は北海道ニセコ町の片山町長、長野県飯田市の牧野市長 他10自治体の市長と職員、大学の専門家、全国環境NGO団体代表 100人のフォーラムのテーマ

「持続可能で豊かさのあるレジリエントな地域社会づくりを実現するために」

このほか、「環境省総合環境政策統括官 中井徳太郎氏による、「地域循環共生圏-日本発の脱炭素化・SDGs構想の実現に向けて」のレクチャーとディスカッションがありました。



市区町村長と環境NGO,専門家によるディスカッションの風景。



SDGsのレクチャー 国連職員 藤野氏



SDGsを活かしたまちづくりニセコ町の取組み
片山健也町長

フックとらべる 最近の読書から

最近の社外研修の影響があり、経営学に関する書籍を読み出しました。結構面白いので皆さんも息抜きに1冊どうぞでしょうか？(ver.2)

●発展する地域衰退する地域 地域が自立するための経済学 ジェイン・ジェイコブス(中村達也訳) ちくま学芸文庫 413pp

経済学者でもない彼女が独自の観察力をもって、衰退する地域や自立する地域の特徴を捉えたものである。非常に読みにくい書物であるが、何度も繰り返し語られるのは、新しいものを生産をし、他の地域に供給をする構造を作り上げることができなければ、衰退し、消滅する地域になるということであった。さて、この長崎はどうか？

●世界でいちばん大切にしたい会社 ラジェンドラ・シソーディア(鈴木立哉訳) 株式会社翔泳社 415pp

人から求められ反映する会社は？“コンシヤス・カンパニー”とは？私利私欲ではなく、みんながwinwinになる方向性を提供し信頼し合える関係を築くことが必要なのである。成功を納めた企業の事例をもとに解析し、あるべき姿を提案する。さて我が社はどうか？

●良い戦略、悪い戦略 リチャード・P・ルメルト(村井章子訳) 日本経済新聞出版社 410pp

現実を直視し群れの大合唱を否定するデータに目を向ければ、また、歴史や他国の教訓から学べば自ずと道は開ける。

●GRIT やりぬく力 アンジェラ・ダックワース(神崎朗子訳) ダイヤモンド社 374pp

非凡、天才など本当にあるのだろうか？大きな成功を得る為には、あきらめない、情熱、粘り強さ、常に前向きに、楽観的に考える力。目的を持

ちポジティブになるには？そしてなってもらうには？多くのヒントは普通に気づいていることを実践することにあった。

●平成の経営 伊丹敬之 日本経済新聞出版社 293pp

神の隠す手とは何か？何かが起こってみなけりゃわからないが、人本主義を貫くことにより、神の隠す手をうまく利用できるようになる。日本的経営のトヨタがなぜ勝ち組となるのか？日産が本田に負けて第3位に甘んじるようになったのか？平成を振り返ってもやはり必要な柱は日本的経営にある。ただ、折り合いが絶妙でしょう。

傘寿を迎えて

鈴木 馨

この度、私共(川里孝弘氏)の傘寿を、お祝いして頂き、心より厚く御礼申し上げます。1939年に生を受けて2019年迄の(昭和14年～平成30年)80年間を皆様に支えられて迎えられた事はこの上もない喜びと感謝に堪えません。皆様方、本当にありがとうございました。

戦中の混乱期から戦後の復興期への、幼少のころより少年の時期へと育ててくれた両親へも、ありがとうございますを申し上げたい。青年の時期より社会人となり、社会へ入ってから多くの皆様方に支えられて、楽しかった事、苦しかった事を乗り越え今日を迎えられた事は、非常の喜びと思っております。

然し、傘寿を迎えてあ一つ、先がない。と大いに反省も致しております。これからは、年寄りの冷や水と言われないようぼつぼつと日々を楽しく送るよう努めたいと思っております。好きなゴルフも免許返上の時期が近まっておりますのでホー

ルインワンもエージシュートも出来ないまま終わります。発起人をして頂きました、菅 洋一様、早瀬 隆司様、宮原 和明様、それに参加して頂きました多くの皆様方ありがとうございました。これからも支えて頂くよう心からお願い申し上げます。

“傘寿” おめでとうございます！

これからも会を支えて頂きますよう心よりお願い申し上げます。



～若手技術者訪問～

今号も、小休止と致します。

寄稿お待ちしております。

自然配植研究会 高田研一

第4章(1)(光、風、水、温度の働き)

2. 風、温度

■ストレスとしての風効果

強い恒常風を受ける斜面方位をもつ地形を風衝地形と呼びます。海岸にみられるように常に一方向から強い風が吹き付ける風衝地形では、風と向かい合う方向に枝が発達できず、主幹も傾いて偏った樹形をとる例を多くみることができるし、大起伏山地の尾根筋のように上昇気流の影響の強いところでは、樹形がことごとく矮生化します。こういった風衝地とつよく結びついた樹木は、風に対する耐性を持ちます。つまり、残積土基盤で風衝植生が発達することが多く、岩盤に貫入するタイプの根系をもつことが多いこと、矮生形で性成熟に達すること、折損害に対して強いことなどです。したがって、風衝地における風は、ストレスとして植生の制限要因とはなりますが、これに耐性をもつ樹種に対しては、競争者を制限することによって生育をむしろアシストすると考えてもよいわけです。

風を植物に被害を与えるストレスとして考える場合、もっとも大きな存在は台風です。台風被害が著しいのは、風衝地ではなく、むしろ風の通り道となる方位をもった（南西方向に開析した）谷あいの斜面などです。しかも、台風襲来頻度の低いところでの被害が著しくなる傾向があります。

また、近年増加する台風によるスギの大量倒伏は、本来スギが成木としては存在しえない凸型地形でスギの造林を行った適地適木を考えて来なかった結果であると考えています。

■風の効用

風が当たりにくい場所を「気が澱む」として、植栽空間としては嫌う伝統がありました。澱む場所には、さまざまな害虫や病気が発生しやすいというわけです。確かに、虫害を受けやすいバラ科植物は、比較的風通しの良い場所の方が被害が少ないという事例が多くみられます。

また、寒冷地の植物を暖地で育てる場合、風通しの悪い場所では気温が上がりやすく、すぐ枯死してしまうため、植栽にあたっては、できる限り風通しの良い場所を選択することが通例です。

■植物にとっての温度をどう考えたらよいのか

温度が植生に与える影響については、第2章のなかでも話したように温量指数（暖かさの指数）、寒さの指数が現実の植物の分布とよく一致することからみてもよく分かります。こういった温度と植物分布との関係では、一般に、寒冷地、冷温帯の植物は夏の暑さが分布の制限要因となり、温暖地、暖温帯の植物にとっては冬の寒さが制限要因となるといわれています。

確かに、植物と温度という直接的な関係でいえば、冠雪によって守られている樹木（特に日本海側の多雪地の下層木にはヒメアオキなどの常緑低木が多い）やササなどが、冬期、雪の少ない年に顔を出して、その部分が枯れてしまうという現象は典型的な温度が植物に被害を与える例の一つでしょう。やがて、こういった事態が続けば、この常緑樹は枯れてしまいます。

しかし、温度が直接に植物の分布に影響を与えていると、簡単に結論づけることはできません。一昔前には、植物の芽の耐凍性がよく調べられました。これをみると、温暖な地方で育つ植物でもかなり大きな耐凍性をもっていることが分かりま

す。つまり、南方系の植物は寒冷地では芽が凍って死ぬから、寒冷地では育たないとは必ずしもいえないというわけです。逆に、北方系、寒冷地の植物を暖地で育てれば、すぐに枯れることはなく、徐々に活力が低下して、十年以上を経過した後で消滅することをよく経験します。これも植物が必要とする養分吸収系が徐々に機能低下することを示しています。

植えたばかりの植栽木が強い直射光によって葉やけを起こすことはよく見られますが、寒冷地の植物が高温によってただちに死ぬといったダイレクトな被害を観察することはあまりないのが現実です。むしろ、温度的なストレスによって土壌微生物相が変化し、特定の微生物相との共生関係を築き上げている植物が間接的に影響を受けるといった理解も重要ではないかと思われます。

※気候馴化

同じ種でも育つ場所が違えば全然違う、と山野草などを育てる方がよく言います。

同じ種という言い方も、実は、種内でかなりの変異があつて、「場所の違い」というのは、実はこれらの遺伝的に固定された形質の違いを反映する場合もあります。しかし、その場所の環境の差が、個体の性質の差となって現れることも多くあります。場所が離れている場合、生育温度の差が個体の性質の差となることがあります。

よく知られているのは、例えば、高山帯の植物を平地で育てようとする場合、徐々に気温の高い標高の低いところに移し、植物に馴れさせるという方法です。これを気候馴化といっています。

高温多湿地で育てた苗を、寒冷乾燥地に植えようとすれば、一旦、気候馴化させなければ、活着はなかなか難しいのが現実です。

3. 水

■水の供給

日本中、水はどこにでもあります。しかし、水のあり方はさまざまです。植物、植生といった見方から、水をみるとき、さまざまな切り口があります。例えば、塩水か、真水か、酸性の水か、アルカリの水かといったことは、続く講座で触れる根系、土壌と関係することですから、ここでは、さておき、次の二つの点について抑えておくことにします。

(1) 流れる水か、澱む水か

流れる水を流水、澱む水を止水といいます。植物にとって水は不可欠なものです。この水源が止水からのものであれば、時として害をなすことがあります。これは、水を住家とする微生物にとって止水条件の方が繁殖条件としては良好で、ミネラル、養分があり、温度条件にも恵まれれば、やがて微生物遷移によって病原性嫌気菌の巣になるためです。嫌気菌には多くの腐敗菌などの植物とは非共生的な微生物が多く含まれ、微生物の生産するメタンガス障害を受けたり、あるいは土壌がグライ化し、根腐れの原因となります。その点で、多くの微生物が繁殖しにくい流水条件の方が大部分の植物にとっては都合が良いといえます。

ただし、例外は降水涵養性湿原（ミズゴケ湿原）で、止水ではあっても、電気伝導度が高く（酸性が強く）、微生物の繁殖が抑えられるために、そこで生育できる植物の種数が多くみられる傾向があります。ただ、だからといっても、水が多すぎる場所では、生育基盤は過湿になりますから、多くの酸素を呼吸に消費する樹木にとっては住み心地の悪い場所であることには変わりありません。したがって、草本群落となるわけです。

(2) 「大きな」水か、「小さな」水か

水には大きさはありませんが、ここではこういう表現をあえて使います。というのは、水の植物に対する働きは、光合成に必要な成分で、蒸散によって植物体温を適温に調整するのにも必要といった生理的側面からみるばかりではなく、生育基盤に対しての影響という側面からみることもできるからです。

生理的側面からみた水は、細胞レベルで吸収されるものですから、「小さな」水です。生理的な影響をもたらすこの「小さな」水については、含まれる活性水素が重要だという意見や、分子サイズが単体のH₂Oとしてではなく、さらに大きな集合体として動いており、これが問題だとする意見、さらに氷結したときの結晶構造でその良否が判断できるという意見などがあって、ここではまだよく分かっていない。しかし、重要であることが将来明らかにされるであろうということにしておきます。

一方、生育基盤に対する影響を与える水というのは、例えば破壊力を持つ水流のような「大きな」なものも、「小さな」ものも影響を与えます。

「大きな」といっても、雨滴といったサイズから、洪水の濁流というレベルまでさまざまなのですが、この働きは、水のもつ破壊力、運搬力に集約されます。これをまとめると例えば、次のような影響の及ぼし方があります。

<「大きな」水の及ぼす影響の例>

- ①雨滴衝撃力により、実生が枯死する。
- ②土壌水分の凍結（霜柱）、融解によって実生、根系が持ち上がり、枯死する。

③土壌中の泥質を浮き上がらせ、乾燥で固化することによって、クラスト（被膜層）を形成する。

このクラストが根系の水分吸収を阻害する。

④土砂、落葉落枝を流す（運搬・堆積作用）

→生育基盤を流亡させる（これには、さまざまなレベルがある）。→生育基盤を形成する。

■水に対する樹木の反応

高木が生育する立地では、水分供給が十分であることが必要条件ですが、多すぎる水は空気の供給源となる土壌孔隙を埋め、通気性不良となります。

したがって、高木林の発達には根系による呼吸が保障されることが、第一に必要で、水は吸収根の展開できる深度内（ふつうは 20cm 程度）にあればよいことになります。森林を構成する下層植生は、根系が高木よりも浅いことがふつうであるため、地下水位が深く、保水性の低い土壌環境であれば、下層植生に乏しい森林となるでしょう。いわば、この土壌ないしは表層地質内の水分分布の粗密が森林の基本構造を決めるといってもよいと思われま

す。いま、植物の利用し得る水には、大きく分けて 3 通りあって、もっとも大きなものとして土壌に含まれる有効水と呼ばれる水分があります。これについては土壌学で問題とされ、明らかにされている水で、土壌の説明の中で触れることにします。第二には表層に分布する土壌よりも深部の基盤岩、不透水層の表面ないしは岩盤内のクラック

（＝割れ目；節理という）中のいわゆる「水みち」を走る水です。第三には、本州で海拔千 m 前後に発達する雲霧帯の斜面、尾根、川霧の多い渓谷、上昇気流の発達する海岸近くの地形などにみ

られる霧＝水滴、ないし昼夜の温度差の大きい硬い岩盤によく見られる結露があります。

第三の水分は樹木の場合、補完的に利用されることが多いと考えられます。第一と第二は、連続した土壌、表層地質において分布するひとまとまりの水として扱うことができるでしょう。このひとまとまりの水の分布は、しかし、立地環境によってきわめて多様です。例えば、粘土層のような不透水層の不均一な存在、厚み、傾斜、深さによって水分分布が大きく異なり、そこに生育する種がさまざまに変化します。この結果、あるところではミズナラの大径木林があっても、その近傍ではコハウチワカエデ林やヒノキ林と変化するような森林のモザイクな植生構造が現れることがあります。

このような水分分布の違いによる大きな住み分けでなくとも、水の分布が引きがねになった多少の森林構成種の分布の変化はどこでもみられるものです。この住み分けは、種特性としての根系の形態と機能に基づいていると考えてもよいでしょう。特に根系の形態は、どの深さでどのような範囲で、どの程度の量の水分を吸収するのかという戦略を反映したものであるともいえます。

山において苗木植栽を行うものにとっては、微地形の凹凸の把握はきわめて重要で、水の抜けにくい凹型地形で苗木を植栽すれば、根系の活着が悪く、ついには枯れてしまうということがたびたびおこりますから、注意が必要です。

■水資源をめぐる競争

自然性の群落ないしは森林での水をめぐる競争は、わが国においてはそれほど頻発するものではないように思われます。通常の場合、乾燥によって枯損する個体をみることはほとんどありませ

ん。年間降水量の少ない瀬戸内地方では、乾燥に耐性のある植物が多く、旱魃によって森林が交代することはまれです。むしろ、旱魃の影響は、年間降水量が安定した地方でときおりみることがあります。ただし、このような時、成木期に達した個体のほとんどは枯死することなく、明らかに乾燥による枯死と認識される個体のほとんどは、上伸期にさしかかろうとする稚樹や幼木であることがほとんどです。このステージでの稚樹、幼木の乾燥による枯損は、これらが蒸散の激しい土壌表面近くで水を吸収していること、多くの場合、過剰密度でこれらの個体が存在していることが影響しているのかもしれません。

4. 本章のまとめに変えて…耐性域、生態的可塑性

人間が毎日何らかのストレスを感じるように、植物はさまざまなストレスを受けています。ストレスが大きすぎれば、生き続けることはできませんが、結構、こういったストレスの耐える力があるのも現実です。

本章では、このストレスを及ぼす原因の内、光、風、温度、水を取り上げて、その中で、植物（樹木）はどううまくこなしているかをいくつかの例で説明しました。

一方、いま取り上げた光、風、温度、水はストレスを及ぼすと同時に、植物側にとっては資源でもあります。生活にとって、プラスにもマイナスにも働く環境要素をどのようにに取り込み、利用し、そして避けていくのかという個々の種の戦略は、生きる者どうしの相互関係とも結びついていきます。

生きるものどうしの関係は、群落成立初期には非常に不安定ですが、やがて、関係は競合的なもの

のから住み分け的なもの、あるいは共生的なものへと、より安定な方向へ進んでいきます。

この中で、本来、植物が厳しいストレスに耐えられる最大限の範囲＝耐性域のかなり内側で、生活の場を築き上げるといった現象をみることができるようになります。

一方、植物は、決まりきった範囲の中で、環境からの影響をただ受け入れているばかりではありません。遺伝的に兼ね備えた性質の中から、その場の環境に応じた形質を発現させ、場合によっては、時間をかけて遺伝的性質を変化させて、新たなストレスに対応し、新たな資源を取り込めるように生活の幅を変化させます。どれぐらいの幅で、こういった環境への対応が可能かをいうときに生態的可塑性という言葉を用います。

英語でいうと、耐性域も生態的可塑性もともに *plasticity* という言い表し方をしますが、日本ではこれまで、もっぱら耐性域と訳し、生物側の主体性をより多く認める生態的可塑性という表現を用いてきませんでした。

＊ドウダンツツジが蛇紋岩地の低木種として、高知県の狭い範囲だけに生育していたものを、人々は全国の緑地に植栽してきました。本来、ドウダンツツジは広い耐性域をもっていたのですが、自然界の植物の相互関係の中で、現実の分布が限られてしまっていたわけです。

＊コバノミツバツツジは、もともと浸食の進んだ尾根筋のツガ林の下層や林縁部で暮らしていましたが、こういった森では林床に光が届くにもかかわらず、草本層が発達しないため、草本層に大きな匍匐(ほふく)層を作り上げました。この匍匐層を形成することで、養分をため込み、速い上伸生長を確保できるようになったのですが、この性質

をもつことが、人が定期的に利用してきた二次林（アカマツ林）での生活を可能とさせました。新たな生活圏を手に入れたわけです。しかし、本来の生活場所よりは、西日が当たり、乾燥を受けやすいために、徐々にこれに耐える性質も獲得してきたと考えられます。こういったコバノミツバツツジの原生林にも二次林にも暮らすことのできる生活能力の幅を生態的可塑性と言い表すわけです。本章では、生育基盤となる土壌以外の環境因子について考えることにします。光については、その利用の仕方の基本原理を述べていますが、後の章で樹形の二つのあり方として自形性とは形性についての議論へと進みます。植物がさまざまな環境因子に対して、一つの方角への適応に向かうのではなく、複数の適応の方向性を持っていることが重要で、そのことによって資源を有効に循環させる多様な生態系が生まれるし、またさまざまな立地にうまく適応した群落が形成されます。第3章に引き続く生態学の基本知識です。

発達した樹林をもつ山中の適潤礫質土壌などのような樹木優占性の高い生育基盤、周辺植生のもとでは、遷移中、後期種の侵入はすみやかに行われることが多くなります。



～ひとりごと～

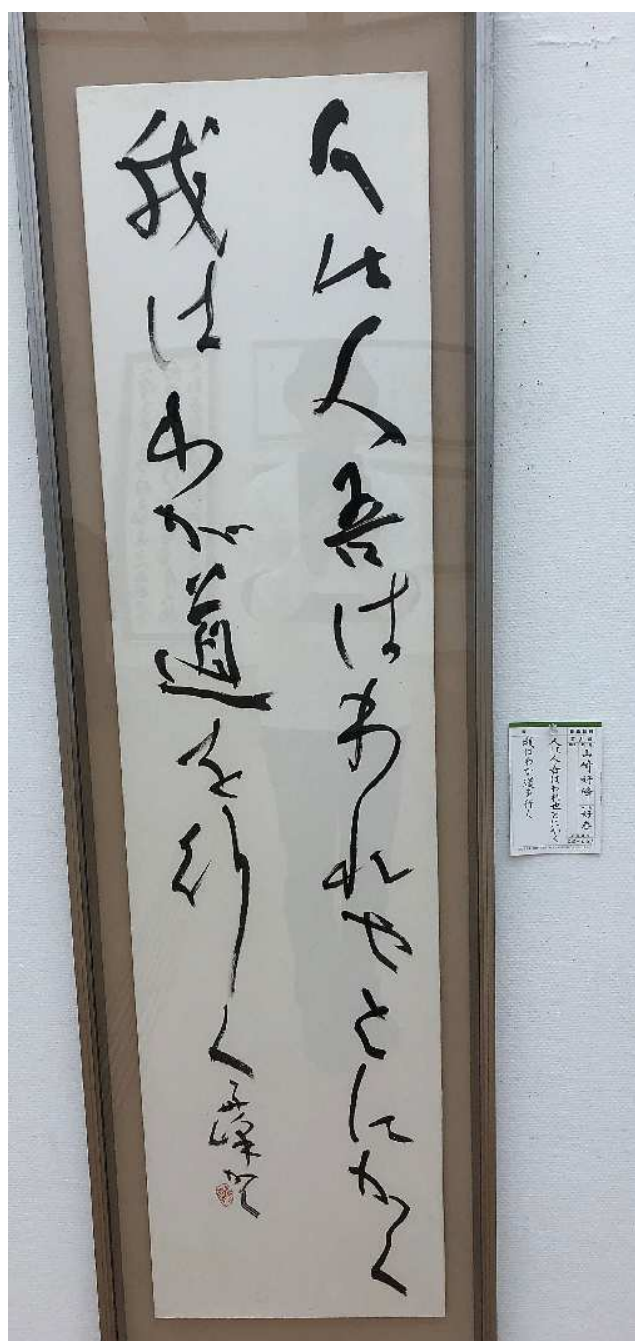
長崎に出て時間があれば、県立美術館にふらっと寄り、無料で見れる展示会などを楽しむことができます。

今回は是。うんいいな～と写真をパチリ。

人は人、我は我とひとりごと。

自己中はいけませんが。。

賞をもらっていないのは何故でしょう？



「じゃけついはら」

バラ科ではなくマメ科なのに何故わたしの名前はバラなの？

Wiki では、“漢字表記では「蛇結茨」であり、枝がもつれ合うさまからへび同士が絡み合っているように見えることから命名された。”とある。

ふんふん。見た目ね。

長崎では、5月連休ごろに開花。色が鮮やかで山中で目立ちます。



果実はマメ科らしい豆がついています。花が上向きなので、藤棚のように見せるには工夫が必要です。どなたか挑戦を！！但し、とげが痛いですよ。

‘とびくず’庭園訪問(1)



3月に叔父のいる関西まで行ってきました。京都では、京都御所の中に運よく入ることができましたので数枚ばかり。

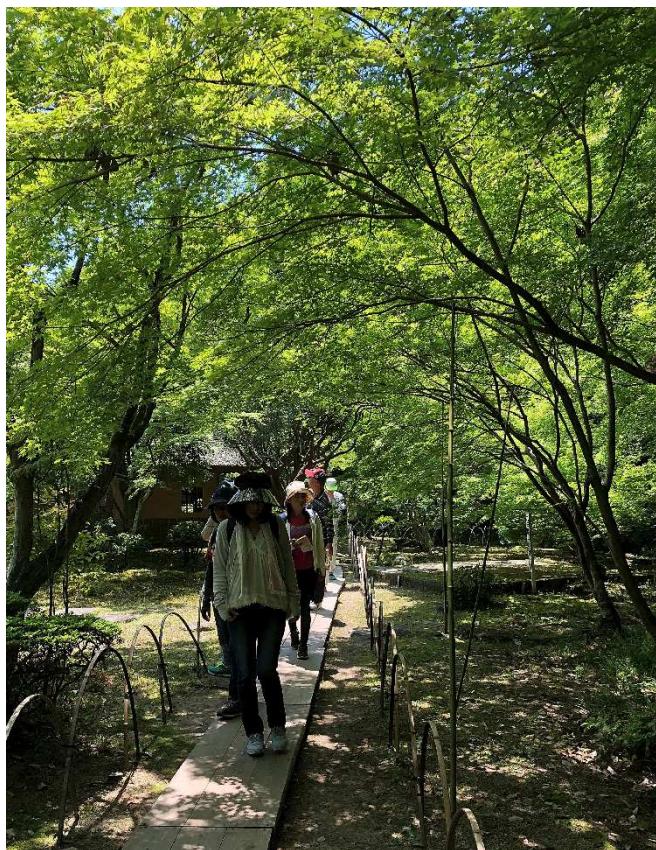


さすがに手入れが行き届いている内庭です。



‘とびくず’庭園訪問(2)

5月の連休に、佐賀神埼の“九年庵”が公開されていたので、ちょこっと行ってきました。新緑のもみじで真緑の中、ヒラドツツジのピンクが少し残る状況でした。さすがに秋は、すごい色になるのだろうと待ち遠しい感じがします。でも、もう少し亜高木に多様性があっても良いかなと思ったのは、贅沢なのでしょうか？



今後も庭園の紹介等ができるといいなと思っています。ここの庭園はいいよ！等ありましたら、事務局にお知らせください。可能な限り掲載したいと思います。できれば、3Dでデータを残しておきたいのですが。。予算がありません。

編集後記

令和に元号が変わり、気分も一新？中身は変わらないけど。。令和第1号をお届けします。

皆さんの協力をお願いします。

私が好きなスタジイの花の咲く4月から5月の山の色。生命力を感じます。萌えている山、きれいだな。



‘ながさき ぶ-らぶら’

平成最後の長崎ランタン！夜の街は多くの人で賑わっていました。佐世保からはちょっと遠いけどたまには足を運びます。この時期防寒は必要ですね。



【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。Word、jpg 等形式もこだわりません。文字数も Free で OK です。長ければ、2号にまたいで掲載致します。

‘ちょこっと雑談’

講習で大阪まで。午前に少し時間があつたので、太陽の塔へ！芸術は爆発だ！！中に入っても待ち時間が長く。。すぐにスタッフに頼み込んでリタイヤ。。。



岡本太郎の発想のすごさ、当時このような造形をどのようにしてイメージできたのだろうか？

天才の頭の構造は、ぼんくらな頭では想像もできない。

太陽の塔の表と裏。（前姿と後姿）



子供のころ（相当小さかった頃ですが）大阪に住んでいたのも、何となく連れて行ってもらったような気がしています。

時々、出張等で外に出かけることができると時間を作って昔の思い出確認に！！

歳とったな～～。お互いに・・・

事務局

会長 宮原和明

〒850-0036 長崎市五島町 3-3-206

NPO 環境カウンセリング協会長崎内

TEL : 095-818-3305 / FAX : 095-826-3693

HP : <http://www.nature-man.org/index.html>

E-mail : kurusaki2004@yahoo.co.jp

NL 編集担当 : 来崎（携帯）090-4989-1440

事務補助 : 牧（携帯）090-7161-5408

事務局長 大塚慎一

〒856-0028 大村市坂口町 500-5(株)琴花園

TEL 0957-53-8121 FAX 0957-52-4823